

《日本書紀》中所描述的對外戰爭 ——以白村江之戰為中心——

鄭家瑜*

摘要

古代東亞各國在政治、經濟、文化等各個層面，都具有密切的關聯，彼此之間形成了一個巨大的共同體--漢字文化圈。

在這個共同體中，各國對於國境、國家等概念也並不完全相同。在此想法的差異之下，爆發了白村江之戰，中國、日本、新羅、百濟全都參與其中。白村江之戰不僅影響了日本對外的政治關係，更深深影響日本的內政，對於古代日本而言可謂影響甚大。同時此戰役也關連到當時東亞區域的國家觀、國土觀、國境以及政治支配權等等的問題。

在日本的文獻中，有關白村江之戰的相關內容，主要記載在《日本書紀》的「天智天皇紀」裡。本稿企圖以《日本書紀》「天智天皇紀」為中心，分析檢討白村江之戰發生的背景、戰況以及戰後的日本，並且將其與中國和朝鮮諸國的文獻進行比較分析，企圖挖掘《日本書紀》「天智天皇紀」之敘述特色。

キーワード：《日本書紀》、天智天皇紀、白村江之戰、對外戰爭、
小中華思想

* 台灣國立政治大學日本語文學系副教授

Foreign Wars in *Nihon Shoki* —Centering at Battle of Baijiangkou—

Cheng, Chia-Yu*

Abstract

The ancient East Asian countries were closely tied at various levels such as politics, economy, culture and so on, then formed a huge community: the cultural circle of Chinese characters.

In this community, the concepts of national borders and nations are not exactly the same. Under this idea, Battle of Baijiangkou broke out. China, Yamato Japan, Silla and Baekje all participated in it. The battle not only affected Japan's foreign political relations, but also deeply affected Japan's internal affairs, which was very significant for ancient Japan. At the same time, the battle was also related to the issues of national outlook, territorial viewpoint, national borders and political dominance in East Asia at the time.

In the Japanese literature, the content about Battle of Baijiangkou is mainly recorded in “Chronicle of Emperor Tenji” of *Nihon Shoki*. This paper is aimed at analysis and review of the background, war situation and post-war Japan of Battle of Baijiangkou based on “Chronicle of Emperor Tenji” of *Nihon Shoki*. And it tries to compare and analyze this chapter with the literature of China and Korea, attempting to find out literary features of “Chronicle of Emperor Tenji” of *Nihon Shoki*.

Keywords: *Nihon Shoki* Chronicle of Emperor Tenji Battle of
Baijiangkou foreign war Sojunghwa

* Associate professor, Department of Japanese, National Chengchi University

『日本書紀』が語る対外戦争 —白村江の戦いを中心に—

鄭家瑜*

要旨

古代の東アジアの国々は政治、経済、文化などにおいて密接な関係を持っており、漢字文化圏という大きな共同体をなしていた。しかし、一つの大きな共同体であるにもかかわらず、国によって国境、またはネーションに対する考えは必ずしも同じではない。このような状況で、中国、日本、新羅、百済といった国々が参与した、白村江の戦いが起きた。この戦いは、古代日本の対外関係のみならず、内政にも大きく影響を与えた。同時に、当時の東アジアという共同体の国家観、国土観、国境、政治的支配権などの問題にも関わっている。

日本の文献では、白村江の戦いに関わる記事は主に『日本書紀』「天智天皇紀」（以下、「天智紀」と略す）に記されている。本稿は『日本書紀』を中心に、古代日本の最大の対外戦争といえる白村江の戦いがどのように描かれているかについて検討し、さらに、参戦国である中国および朝鮮諸国の文献とを比較対照することを通して、『日本書紀』の記し方の特色を明らかにする試みである。

キーワード：『日本書紀』、天智天皇紀、白村江の戦い、対外戦争、小中華思想

* 台湾国立政治大学日本語文学科副教授

『日本書紀』が語る対外戦争 —白村江の戦いを中心に—

鄭家瑜

1. はじめに

古代の東アジアの国々は政治、経済、文化などにおいて密接な関係を持っており、漢字文化圏という大きな共同体をなしている。しかし、一つの大きな共同体にあるにもかかわらず、国によって国境、またはネーションに対する考えは必ずしも同じではない。このような状況で、中国、日本、新羅、百済といった国々が参与した、白村江の戦いが起きた。

日本の文献では、白村江の戦いに関わる記事は主に『日本書紀』「天智天皇紀」（以下、「天智紀」と略す）二年条¹（663）に記されている。日本が百済を救援するために、兵士・軍船を送り、百済・日本の連合軍が、白村江の口で新羅・唐軍の連合軍と戦い、最後に百済・日本が敗戦して、百済が滅びたという。

天智天皇（中大兄皇子）は皇極、孝徳、斉明、天智、この四朝に亘り、様々な改革・政変・戦いに携わっている。たとえば、皇極天皇時代の乙巳の変、孝徳天皇時代の大化改新、斉明天皇時代の百済救援活動などが挙げられる。この天智天皇（中大兄皇子）が参与した事件の中で、最も大きかったのは対外戦争の白村江の戦いにほかならない。

ところで、この白村江の戦いは「単なる局地戦の一戦闘ではなく、それは唐の東北経略、半島経略の一環の中でしか評価できない」、さ

¹『日本書紀』によれば、「天智紀」二年は中大兄皇子が称制していた時で、まだ即位していなかった。斉明天皇崩御後の六年間、中大兄皇子が皇太子として政権を握り続けていた。近江への遷都後、「天智紀」七年に至って、中大兄皇子が天皇として即位したという。ここで、『日本書紀』の記し方に従い、「天智紀」二年条で記す。以下同。

らに「天智朝を考える場合、七世紀という時代的な考察と、東アジアという空間的な考察の両面からみていく必要がある」と考えられている²。このようなことから、白村江の戦いの考察は、日本の状況だけではなく、七世紀という時代における東アジアの国際情勢を理解する上で重要であり、同時に、『日本書紀』「天智紀」を分析する際に不可欠であるといえよう。

こうした白村江の戦いの持つ意義を念頭に置き、本稿ではこの戦いが『日本書紀』においてどのように描かれているかを、『日本書紀』「天智紀」を中心に考察したい。さらに、七世紀における東アジアの国際情勢を考慮した上で、参戦国である中国および朝鮮諸国の文献との比較対照を通して、『日本書紀』の記述の特色を明らかにしたい。

さて、『日本書紀』「天智紀」の内容をみれば、(一) 白村江の戦いの背景 (二) 白村江の戦い、(三) 敗戦後の天智朝、この三つのパートに大別できる。以下はこの三つのパートについて詳しく見ていきたいと思う。なお、各テキストの原文・訓読の引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)による。傍点・下線はすべて筆者によるものである。

2. 白村江の戦いの背景

さて、「天智紀」の冒頭には次のように記している。

①天豊財重日足姫天皇四年、讓位於天万豊日天皇。立天皇為皇太子。②天万豊日天皇後五年十月崩。明年、皇祖母尊即天皇位。七年七月丁巳、崩。③皇太子素服称制。是月、蘇將軍与突厥王子契苾加力等、水陸二路至于高麗城下。④皇太子遷居于長津宮、稍聽水表之軍政。

この記述によれば、①は皇極天皇(天豊財重日足姫天皇)が孝徳天皇(天万豊日天皇)に讓位し、孝徳天皇が中大兄皇子を皇太子と

² 中村修也『天智朝と東アジア 唐の支配から律令国家へ』、東京、NHK 出版、2016、pp. 16-17

した。②は孝徳天皇が崩御すると、皇祖母尊（皇極天皇）が再び（斉明）天皇の位に即位し、七年の執政を経て、崩御した。③は斉明天皇が崩御したため、皇太子の中大兄皇子が「素服称制」を行った。その月、蘇將軍（唐の蘇定方）と突厥の王子が水路の二路から高麗城に迫った。④高麗城の緊張状態により、中大兄皇子が長津宮に移り、「稍聴水表之軍政」を行った。ここにある「水表」とは『新編日本古典文学全集 4-日本書紀 3』の頭注（p 47、p 250）によれば、「海表」の意で、「海外」を指している。つまり、「稍聴水表之軍政」とは「次第に海外の軍政に着手していった」という意である。この「天智紀」の冒頭部からも、高麗が攻められたことにより、中大兄皇子が朝鮮半島諸国の情勢、また唐の朝鮮諸国に対する態度に関して、ますます関心が高まっていることが分かる。また、白村江の戦いの背景として、斉明天皇が崩御して中大兄皇子が称制し始めた時から「天智紀」二年条八月までの記事に注意を払う必要がある。ここで、便宜のため、白村江の戦いに関わる重要な記事を簡条書きで示しておく。

(1) (中大兄皇子称制) 八月、遣前將軍大花下阿曇比羅夫連・小花下河辺百枝臣等、後將軍大花下阿倍引田比羅夫臣・大山上物部連熊・大山上守君大石等、救於百濟。仍送兵仗・五穀。或本、(後略)。

(2) 九月、皇太子御長津宮、以織冠授於百濟王子豐璋。復以多臣蔣敷之妹妻之焉。乃遣大山下狹井連檣榔・小山下秦造田来津、率軍五千餘、衛送於本郷。於是豐璋入国之時、福信迎來、稽首奉国朝政、皆悉委焉。

(3) 是歳、(中略) 又日本救高麗軍將等、泊于百濟加巴利浜而然火焉。灰變為孔、有細響。如鳴鏑。或曰、高麗・百濟終亡之徴乎。

(4) 元年春正月辛卯朔丁巳、賜百濟佐平鬼室福信矢十万隻・糸五百斤・綿一千斤・布一千端・韋一千張・稻種三千斛。三月庚寅朔癸巳、賜百濟王布三百端。

(5) 是月、唐人・新羅人伐高麗。々々乞救国家。仍遣軍將、拋疏留城。

(6) 夏四月、鼠産於馬尾。积道頭占曰、北国之人将附南国。蓋高麗破、而属日本乎。

(7) 五月、大將軍大錦中阿曇比羅夫連等、率船師一百七十艘、送豐璋等於百濟国、宣勅、以豐璋等使繼其位。又予金策於福信、而撫其背、褒賜爵祿。于時豐璋等与福信、稽首受勅、衆為流涕。

(8) 六月己未朔丙戌、百濟遣達率万智等、進調獻物。

(9) 冬十二月丙戌朔、百濟王豐璋、其臣佐平福信等、与狭井連闕名。朴市田来津議曰、此州柔者遠隔田畝、土地磽确、非農桑之地。是拒戰之場。此焉久処、民可飢饉。今可遷於避城。(中略)於是朴市田来津独進而諫曰、避城与敵所在之間、一夜可行。相近茲甚。若有不虞、其悔難及者矣。(中略)遂不聽諫、而都避城。

(10) 是歲、為救百濟、修繕兵甲、備具船舶、儲設軍糧。

(11) 二年春二月乙酉朔丙戌、百濟遣達率金受等進調。新羅人燒燔百濟南畔四州、并取安德等要地。於是避城去賊近。故勢不能居。乃還居於州柔。如田来津之所計。

(12) 是月、佐平福信上送唐俘統守言等。

(13) (二年)三月、遣前將軍上毛野君稚子・間人連大蓋、中將軍巨勢神前臣詛語・三輪君根麻呂、後將軍阿倍引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄、率二万七千人、打新羅。

(14) 夏五月癸丑朔、犬上君闕名。馳、告兵事於高麗而還。

(15) 六月、前將軍上毛野君稚子等取新羅沙鼻・岐奴江二城。百濟王豐璋嫌福信有謀反心、以革穿掌而縛。(中略)王勒健兒、斬而醢首。

(16) 秋八月壬午朔甲午、新羅以百濟王斬己良將、謀直入国先取州柔。於是百濟知賊所計、謂諸將曰、今聞、大日本国之救將廬原君臣、率健兒万餘、正当越海而至。願諸將軍等応預凶之。我欲自往待饗白村。

さて、以上の十六カ条の内容を時間順に沿ってまとめれば、(1) - (3) は天智元年以前の内容で、(4) - (10) は天智元年、(11) - (16) は天智二年のことである。以下、これら十六カ条の内容を検

討していこう。

まず、(1) - (3) についてだが、(1) は日本が援軍を送るだけでなく、兵仗や五穀など、軍事用品から食料まで授与することが記されている。(2) には「皇太子御長津宮、以織冠授於百濟王子豊璋。復以多臣蔣敷之妹妻之焉。」とあるが、大和朝廷が百濟の王子豊璋に「織冠」を授けたという記載が見える。日本の冠位を百濟王子に授けたのは「国内の官人並に扱うことで、百濟に対する国際的優位を示³」し、「倭国と百濟が君臣関係となったという主張を可視的に示す表象⁴」であったと考えられている。また、冠位を与えた上に、多臣蔣敷の妹を妻に娶らせたということについても、「倭国の女性を豊璋の妃とするということは、やがてこの女性が産むであろう王子がそのつぎの百濟王にでもなれば、倭国の血の入った王子が百濟王となることになり、〈東夷の小帝国〉構想が大きく進展することになる。⁵」とされている。このようなことから、大和王朝による豊璋に対する一連の行動は、百濟を日本の臣下として位置づけようとすることで、中国という帝国構造を学び、「東夷の小帝国」を作り出そうとしていた意図が示唆されている。

同時に、(3) のように日本は高麗に対しても救援軍を差し出している。このように、中大兄皇子が称制期間には朝鮮三国（高麗、百濟、新羅）の中で、百濟と高麗とも往来しており、特に百濟とは親交があることが読み取れる。

つづいて、(4) - (10) はどうか。これらの記事をまとめてみれば、主に中大兄皇子が百濟に対して一層多くの物資を送り、百濟の

³ 『新編日本古典文学全集 4-日本書紀③』の頭注 (p. 250) によれば、「大化五年二月に制定した十九階冠位の最上位〈大織・小織〉か。今までの冠を授けられた者がなく、上下の区別がなかったので〈織冠〉と称したか。日本の冠位を百濟王子に授与するのは国内の官人並に扱うことで、百濟に対する国際的優位を示すもの」という。

⁴ また、倉本一宏『戦争の日本古代史 好太王碑、白村江から刀伊の入寇まで』（東京、講談社、2017、pp. 128-129）では、「冠位というのは君主が臣下に授けるものであり、大王代行の中大兄が豊璋にこれを授けたというのは、倭国と百濟が君臣関係となったという主張を可視的に示す表象であった。」と指摘している。

⁵ 倉本一宏、前掲注（4）書、同頁。

王位と内政に対しても深く干渉していたこと、また百済側が天智朝に朝貢し始め、日本も百済救援のために様々な支度をしたことが語られている。さらに、(7)にある大和朝廷からの「宣勅」と、百済人の「稽首受勅」という表現が見えるが、「勅」とは中国の皇帝が臣下に用いる用語であり、「君臣関係」が示唆されている⁶。また、(8)は百済が日本に調を送った(朝貢した)ことだが、この記事からも百済が自らを「朝貢国」とし、日本を「宗主国」とする政治関係が読み取れる。すなわち、日本と百済との間に行われた「ミツキ」の貢納により、「支配—非支配」の関係が保たれ、上下関係が築かれているのである⁷。これも(7)の「勅(日本)—受勅(百済)」という関係に通じており、日本が百済より優位的な存在であることが示されている。

引き続きの(11) - (16)はどうか。(11) - (16)は主に百済から日本への朝貢、都を避城に移した百済王室が再び州柔に戻ったこと、福信が唐の俘虜である続守言を日本に送ったこと、新羅が百済を攻めつづけているので、日本が百済を救援し、新羅と戦ったことなどが記されている。日本から出した援軍は(13)の記事によると、二万七千人とあり、(16)の記事によると、「率健児万餘」とある。合わせて四万近くの兵士を差し出したことが想定できる。

以上は年代別によってまとめた資料だが、いずれも白村江の戦いの発生に深く関連しており、白村江の戦いの国家的背景として見ることができる。

⁶ 広瀬憲雄『古代日本外交史—東部ユーラシアの視点から読み直す』(東京、講談社、2014、pp.181-182)によれば、「中国王朝の国際秩序は、中国皇帝と周辺諸勢力君長との君臣関係を基本に構成されており、その君臣関係は、中国皇帝が周辺君長に対して、中国国内の臣下に対するものと同様の詔勅(慰勞詔書・論事勅書)を発給する一方で、周辺君長は中国皇帝に対して、中国国内の臣下が皇帝に奉るものと同様の「表」を奉るというかたちで表現されていた。」という。

⁷ 広瀬(前掲注6書、同頁)によれば、「倭国の国際秩序は、中国王朝のものとはまったく異なる構造である。倭国の国際秩序は、君臣関係を基本とするのではなく、倭国国内における服属儀礼の貢進物「ミツキ」の貢納により表現されている。」という。しかし、注(6)の内容から見れば、やはり倭国にも中国と同じような「勅」の政治的行為があるので、完全に中国と周辺国家との国際秩序の構造と異なるわけでもないと言わなければならない。

さらに、この十六条の記事の中で、(1) (2) (4) (10) (13) は、主に大和朝廷が百済の王子に官位を与え、さらに婚姻関係を結ばせ、百済を自らの臣下にさせ、多くの物資を与え、また救援部隊を送ったことを記している。(7) (9) は大和朝廷が豊璋を皇位に就かせたこと、また百済の遷都の件について意見を述べたことを記述するものである。(8) (11) (12) は百済が日本に朝貢し、唐の俘虜を日本に送ったことを記載している。(3) (5) (6) (14) は高麗も援軍を送り、緊急な軍事を伝えること、(15) (16) は百済の内乱(百済王が福信を斬ったこと)の機で、新羅が百済を攻略しようとするとき、日本が援軍を送ったことを述べている。これらの記述を通して、次の三点が見出されよう。

- (一) 朝鮮三国(百済、新羅、高麗)の厳しい情勢の中で、新羅が高麗、百済に対して常に攻略しようとする姿勢にあるため、日本は度重ねて百済、高麗に援軍を送ったこと。つまり、日本が高麗と百済を新羅の攻撃から守ったという「守り役」を果たしていることが分かる。
- (二) 天智朝が積極的に百済を傘下に入れようとしたこと。大和朝廷が軍隊や物資などを惜しまずに百済に送り、豊璋を扶植し、自らの「臣下」とさせ、さらに百済の王位に就かせた。また積極的に百済の内政に関与し、百済を自らの付属国の一つとして位置づけようとした。
- (三) 百済が日本による庇護を求める中、その見返りとして日本に朝貢すること。こうした「宗主国-朝貢国」といった関係は日本にとってたいへん望ましく喜ばしいものである。そのために、朝鮮諸国の内政に関与し続けて、百済・新羅の「守り役」をやり続けてきたことが考えられよう。

以上の三点はいずれも中大兄皇子が白村江の戦いに踏み出した理由であり、白村江の戦いに参与した背景として注目に値する。次に、白村江の戦いの経過について詳しく見ていきたいが、節を変えて検討していくことにする。

3. 白村江の戦い

白村江の戦いは天智二年八月（六六三年の八月二十七日）から、翌日にかけて戦われた。百済の復興運動に及ぼした決定的な影響はいうまでもないが、当時の世界帝国・唐と戦ったという点で、日本史上でも特異な体験の一つとあってよい。この戦いについて、「天智紀」二年八月条には次のように記されている。

秋八月壬午朔甲午、①新羅以百済王斬己良将、謀直入国先取州柔。於是百済知賊所計、謂諸将曰、今聞、大日本国之救将廬原君臣、率健児万餘、正当越海而至。願諸將軍等応預凶之。我欲自往待饗白村。戊戌、賊将至於州柔、繞其王城。②大唐軍将率戦船一百七十艘、陣烈於白村江。戊申、日本船師初至者与大唐船師合戦。日本不利而退。大唐堅陣而守。己酉、③日本諸将与百済王、不觀氣象、而相謂之曰、我等争先、彼応自退。更率日本乱伍中軍之卒、進打大唐堅陣之軍。④大唐便自左右夾船繞戦。須臾之際、官軍敗績。赴水溺死者衆。臚舳不得迴旋。朴市田来津仰天而誓、切齒而嘖、殺数十人、於焉戦死。⑤是時百済王豊璋与数人乗船逃去高麗。九月辛亥朔丁巳、百済州柔城、始降於唐。是時国人相謂之曰、州柔降矣。事無奈何。百済之名絶于今日。

この内容を見てみれば、①は、前述したとおりに新羅が百済に入り、その王城である州柔を攻め込もうとすると、「大日本国」が百済のために一万余りの軍兵を率いて、海を渡り朝鮮半島に赴いていたことが記されている。②は、唐朝は一百七十艘の戦船を構え、日本の軍隊と白村江で戦った。日本は戦事的情勢が不利と判断して退き、守衛の形をしていたのだが、唐朝の軍隊は固くその場を守っていた。③は、日本と百済王は互いにうまく連合できず、日本軍の内部は混乱し、戦略がなかったという。④は、唐軍は「左右夾船繞戦」の戦略を採り、瞬く間に日本軍を撃破した。⑤は百済王が数人とともに船に乗り込み、高麗に逃げてしまったために、百済が投降

したことを述べている。

さて、以上に挙げたのは『日本書紀』に記載されている白村江の戦いの様子であったが、同じ白村江の戦いの参加国として、中国および朝鮮諸国はどのようにこの戦事を記述しているのだろうか。以下は中国から朝鮮諸国へという順によって検討していきたい。

白村江の戦いの経緯を記述している中国側の資料といえば、まず、『舊唐書』と『資治通鑑』が代表として挙げられよう。『舊唐書・卷一百九十九（上）・百濟』には「(永徽)六年，新羅王金春秋又表稱百濟與高麗、靺鞨侵其北界，已沒三十餘城。」「顯慶五年，命左衛大將軍蘇定方統兵討之，大破其國」という記述がある。

この記述からは、新羅が大唐に表を出し、「百濟が高麗、靺鞨と連合して新羅の北界を侵し、既に三十を超えた城を奪った」と訴えたこと、また(唐高宗)顯慶五年(661)が蘇定方を派遣し、百濟を破ったことが分かる。

蘇定方が百濟を破った経緯については、『舊唐書・劉仁軌傳』では次のように記されている。

(顯慶)五年，高宗征遼，令仁軌監統水軍，以後期坐免，特令以白衣隨軍自効。①時蘇定方既平百濟，留郎將劉仁願於百濟府城鎮守，又以左衛中郎將王文度為熊津都督，安撫其餘眾。文度濟海病卒。②百濟為僧道琛、舊將福信率眾復叛，立故王子扶餘豐為王，(中略)③時扶餘豐及福信等以真峴城臨江高險，又當衝要，加兵守之。仁軌引新羅之兵，乘夜薄城，四面攀草而上，比明而入據其城，遂通新羅運糧之路。俄而餘豐襲殺福信，又遣使往高麗及倭國請兵，以拒官軍。(中略)④仁軌乃別率杜爽、扶餘隆率水軍及糧船，自熊津江往白江，會陸軍同趣周留城。⑤仁軌遇倭兵於白江之口，四戰捷，焚其舟四百艘，煙焰漲天，海水皆赤，賊眾大潰。⑥餘豐脫身而走，獲其寶劍。偽王子扶餘忠勝、忠志等率士女及倭眾并耽羅國使，一時並降。百濟諸城，皆復歸順。賊帥遲受信據任存城不降。

この段において、①は顯慶五年に高宗が遼を征伐する際に、蘇定

方が既に百済を平定したことを記している。②は百済の福信が故王子扶餘豊を立て復興運動をしようとした経緯を述べる。③は劉仁軌が新羅の兵を遣い、さらに新羅への道を通じたこと、また百済の王である扶餘豊が福信を斬り、さらに高麗および倭国に援軍を求め、官軍（唐軍）に対抗することを語っている。④は扶餘豊が水軍と糧船を用意し、熊津江から白江に向かい、陸軍と合流し、ともに周留城に赴いたという。⑤は劉仁軌が白江の口で日本軍（倭軍）に出会い、四戦四勝をしたこと、また、唐軍が四百の日本船（倭船）を燃やし、戦況が惨烈して海の色さえ赤くなったこと、さらに「賊眾大潰」の様子を描いている。ここにいう「賊眾」はいうまでもなく百済軍と日本軍を指しているのである。⑥は餘豊が逃走し、宝剣を得たこと、偽王子の扶餘忠勝、忠志が投降し、百済の諸城がすべて平定されたが、ただ賊帥の遲受信が降らないことを記している。

さて、この『舊唐書・劉仁軌傳』における④⑤⑥については、『資治通鑑・卷第二百一』にもほぼ同じ趣旨のものが記されている。

九月戊午、①熊津道行軍總管、右威衛將軍孫仁師等破百濟餘眾及倭兵於白江，拔其周留城。初，劉仁願、劉仁軌既克真峴城，詔孫仁師將兵，浮海助之。百濟王豐南引倭人以拒唐兵，仁師與仁願、仁軌合兵，勢大振。（中略）於是仁師、仁願與新羅王法敏將陸軍以進，仁軌與別將杜爽、扶餘隆將水軍及糧船自熊津入白江，以會陸軍，同趣周留城。②遇倭兵於白江口，四戰皆捷，焚其舟四百艘，煙炎灼天，海水皆赤。③百濟王豐脫身奔高麗，王子忠勝、忠志等帥眾降，百濟盡平，唯別帥遲受信據任存城，不下。

この内容を見れば、①は百済軍と日本軍が白江に合流したことを記している。②は劉仁願、劉仁軌によって率いられた唐軍は白江口で日本軍（倭軍）に出会い、その後、四戦四勝をしたこと、また、唐兵が四百の日本船（倭船）を燃やし、戦況が惨烈して海の色さえ赤くなったことを描いている。③は、百済王豊が高麗に逃げてしまい、将軍らも投降し、百済が悉く平安になったが、唯一投降し

なかったのが別帥遲受信であったことを示している。

ところが、『資治通鑑・卷第二百一』は『舊唐書・劉仁軌傳』と比べれば、やや記し方の違いも認められよう。たとえば、『舊唐書・劉仁軌傳』には「賊眾大潰、賊帥遲受信」というように、「賊」という文字がよく用いられ、それを以て百済・倭国連合軍を表している。また、唐軍を「官軍」で表現している。さらに、「餘豐脱身而走，獲其寶劍」とあるように、逃走後の百済王餘豐が宝劍を得たというエピソードも付け加えられている。

一方の『資治通鑑・卷第二百一』では、賊眾大潰という記述がなく、「賊帥」遲受信を「別帥」遲受信としている。『舊唐書・劉仁軌傳』の「賊」という文字を使いがちな傾向は認められない。賊眾「大潰」という記述もない。逃走後の百済王餘豐の動向に関わる記述もない。さらに「官軍」といった表現もなく、代わりに「唐兵」としている。これらのことから、『舊唐書・劉仁軌傳』は非常に身近に白村江の戦を描いており、記述者の視線は唐、しいては劉仁軌側に置かれていることが分かる。そのために、敵を「賊」とし、わが軍を「官軍」とするのである。

ただし、『舊唐書・劉仁軌傳』には「仁軌遇倭兵於白江之口，四戰捷，焚其舟四百艘，烟焰漲天，海水皆赤」とあり、『資治通鑑・卷第二百一』には「遇倭兵於白江口，四戰皆捷，焚其舟四百艘，煙炎灼天，海水皆赤。」とあるように、唐軍が如何に倭軍に遭遇し、戦いの中で唐軍が如何に全勝を得たことについて両者の描写は殆ど同じ表現である。『資治通鑑』がある程度『舊唐書』を参考にしたことも想定できよう。

こうした中国側の資料をさらに『日本書紀』『天智紀』二年八月条の内容と見合わせれば、どうなるだろうか。まず、「倭兵」という表現は『日本書紀』『天智紀』には認められず、「日本」という表記で通すことが注目されよう。次に、「四戰皆捷，焚其舟四百艘，煙炎灼天，海水皆赤」といった戦いの経緯を記す章段がない。代わりに、「天智紀」の④に示されているように、「大唐便自左右夾船繞戰。須

與之際、官軍敗績。赴水溺死者衆。艫舳不得迴旋。朴市田来津仰天而誓、切齒而嗔、殺数十人、於焉戰死。」とある。「須臾之際」（瞬く間に）、「官軍」（日本軍）が「大唐便自左右夾船繞戰」という特別な戦略によって、敗戦し、死者が多く出たという。そして、「朴市田来津」という日本軍の将軍が天を仰いで誓いを立て、歯噛みをして怒って数十人を殺し、最終的に戦死してしまったという。これは日本軍を代表とする将軍「朴市田来津」の尽力した戦いについて焦点を当て、日本軍の忠烈さ、勇猛さを強調しているような記し方なのである。

さらに、「天智紀」の②に示されている「大唐軍将率戰船一百七十艘、陣烈於白村江。」のように、「天智紀」は唐軍の軍勢の雄大さを強調しながらも、日本側がどれぐらいの軍兵・軍船を派遣したかについては明白にしていない。単に①の「大日本国之救将廬原君臣、率健兒万餘、正当越海而至。」とあるごとく、一万人余りの軍兵が海に渡り百済救援に向かうという記述のみである。自分の軍勢を明示せず、かわりに大唐（敵軍）の軍勢の強さ、戦略の巧妙さを非常に強調しているような記し方を『日本書紀』が取っているのである。このような記し方の裏面には、恐らく日本軍がやむをえず、戦敗してしまった理由を説明しようとする意図があったのであろう。

さて、日本側が自分の軍勢に対して詳しく描いていないことは、『三国史記・新羅本紀第七』を通してその一端が窺える。

都護①劉仁願 遠鎮孤城 四面皆賊 恒被百濟侵圍 常蒙新羅
 解救 一萬漢兵 四年衣食新羅(中略)國家恩澤 雖復無涯 新
 羅効忠 亦足矜憫 至龍朔三年 摠管孫仁師 領兵來救府城
 新羅兵馬 亦發同征 行至周留城下②此時 倭國船兵 來助百
 濟 倭船千艘 停在白沙 百濟精騎 岸上守船 新羅驍騎 為
 漢前鋒 先破岸陣 周留失膽 遂即降下

この、『三国史記・新羅本紀第七』の記述によれば、①のように、劉仁願の軍隊が常に百済に包囲されていた。そのとき、新羅が常にそれを救援し、さらに一万余りの「漢兵」（唐軍）に四年ほど新羅で

の生活需要を提供した。新羅が唐に対して忠を尽くした心があり、のちに唐軍とともに百済を討伐し、百済の首都である周留城に至った。そのとき、②のように、日本は千艘の船を派遣し、百済への救援を行った。百済の精良な騎兵も岸辺で倭船を待ち構えていた。さらに、「新羅驍騎」というように新羅の軍隊を先鋒部隊とした中国軍が、まず上陸し、岸辺にいる軍陣を破り、首都である周留（『日本書紀』では「州柔」とする）を攻め、百済を投降させたという内容が記されている。このように、『三国史記・新羅本紀』の記事は短いが、『日本書紀』「天智紀」に見えない白沙（白村江）に泊まっている日本の軍船の数（「倭船千艘」）が記されている。

また、「百済精騎、岸上守船、新羅驍騎、為漢前鋒、先破岸陣」とあるごとく、新羅の驍騎が白村江の岸に構えていた百済の騎兵隊を破ったという。これもまた日本と中国、さらに『三国史記・百済本紀』の中で見られないものである。この記事には自らの功績を誇示しようとした新羅側の意図が強く読み取れる。このように考えると、「倭船千艘」という記述も必ずしも真実の数ではなく、新羅の武勇を強調しようとする記し方として見てよかろう。ただし、『舊唐書・劉仁軌傳』、『資治通鑑・卷第二百一』に記されている倭船が燃やされたこと、また戦況の猛烈さといった描写からも、当時の倭船の数が多かったことも想定できる。

さて、同じく『三国史記』の内容だが、百済側はこの戦事について、如何に記述しているのであろうか。『三国史記・百済本紀 第六 義慈王』では長い紙幅を占め、非常に詳しく描写しているが、要点を簡略に述べると次のようになる。すなわち、唐の高宗が大將軍蘇定方を大摠管とし、唐軍（計十三万）を統率し、新羅を救援した。唐軍が新羅將軍の金庾信の軍隊（精兵五萬）と合流し、百済の要地一白江と炭岷をそれぞれに撃破し、百済が「兵寡力屈」のために敗戦した。そして、太子孝が北方に逃亡し、王次子泰が自立して王となったが、定方の軍隊によって百済が滅亡されたという。

これに引き続き、『三国史記・百済本紀 第六 義慈王』では、蘇定

方によって滅ぼされた百済が如何に日本の力を借り、復興を図ろうとしている経緯についても記されている。関連する点は次のようにまとめられよう。

- ① 百済の武王従子である福信が、人質として日本にいた古王子扶餘豊を迎えて王として立て、唐軍（劉仁願）が都城を包囲した。
- ② 劉仁軌が召命を受け、兵を率いて新羅の兵も集め、劉仁願の援軍に行った。
- ③ 福信が劉仁軌・新羅の連合軍に叶わず、多くの兵士が戦死してしまい、都城も任存城へ移った。
- ④ 新羅兵が軍糧が尽きたために撤退する際、道琛と福信が多くの人を集めた。さらに、劉仁軌に「聞大唐與新羅約誓 百濟無問老少 一切殺之 然後以國付新羅 與其受死 豈若戰亡 所以聚結自固守耳」という旨の手紙を送った。一方の仁軌も道琛らの傲慢さを訴えた。
- ⑤ 劉仁軌が新羅の援軍を求めたが、百済の福信が新羅の救援軍を撃破したゆえに、新羅はあえて再び出兵することができなかった。
- ⑥ 福信が百済王の扶餘豊の引き止めを聞かず、道琛を斬った。さらに劉仁願に表函を出し、「大使等何時西還 當遣相送」という意志を表明したが、仁願が福信の好意を受け入れなかった。

以上の六点もまた白村江の戦いの勃発に繋がっている要素である。さて、『三国史記・百濟本紀 第六 義慈王』においてもこの辺の事情が示されている。

二年七月 ①仁願・仁軌等 大破福信餘衆於熊津之東(中略)②時福信既專權 與扶餘豊寢相猜忌 福信稱疾 臥於窟室 欲俟豊問疾執殺之 豊知之 帥親信 掩殺福信 遣使高句麗倭國 乞師以拒唐兵 ③孫仁師中路迎擊 破之 遂與仁願之衆相合 士氣大振(中略)仁師・仁願及羅王金法敏帥陸軍進 ④劉仁軌及別帥杜爽 扶餘隆 帥水軍及糧船 自熊津江往白江 以會陸軍 同趨周留城 遇倭人白江口 四戰皆克 焚其舟四百艘 煙炎灼天

海水爲丹 ⑤王扶餘豊脱身而走 不知所在 或云奔高句麗 獲其寶劍 王子扶餘忠勝・忠志等帥其衆 與倭人並降 獨遲受信 據任存城未下 初黑齒常之嘯聚亡散 旬日間歸附者三萬餘人

この段の内容からも、福信が好意を示したにもかかわらず、①のように仁願・仁軌が新羅の軍兵と合流し、福信の軍を切り殺したことが分かる。②ではさらに、百済国内でも、福信の専権のため、百済王の扶餘豊が側近を使い、福信を暗殺した。同時に、高句麗・倭国に救援軍を求め、共に唐軍を抵抗するように頼んだ。しかし、③のように孫仁師の軍隊が仁願と合流した。仁師・仁願及び新羅王金法敏が自ら陸軍を率いて、共に戦いに参与した。すると、④のように仁軌がまた百済の扶餘隆と結び、白江に向かい、都の周留城に行くことにした。そのとき、白江口で倭人の軍に出合い、四戦すべて勝利した。⑤百済の王扶餘豊が逃走して行方未明になり、一説には高句麗に逃げ、宝剣を得たと言われている。残った扶餘忠勝・忠志が人々を率いて、倭人とともに投降した。ただ遅受信が任存城を拠し、投降しなかったという。以上の記事を通して、扶餘豊が福信を暗殺し、扶餘隆が唐軍と連合したような百済内部の分裂の事情が読み取れる。

ここに挙げてある『三国史記・百済本紀 第六 義慈王』の記事は、主に『舊唐書・劉仁軌傳』、『資治通鑑・卷第二百一』とはあまり変わらないが、扶餘豊が逃走して「宝剣を得た」ということは『資治通鑑・卷第二百一』には見えず、『舊唐書・劉仁軌傳』にしか記されていない。また、『舊唐書・劉仁軌傳』には「餘豊襲殺福信，又遣使往高麗及倭國請兵」とあるが、『資治通鑑・卷第二百一』には「百済王豊南引倭人以拒唐兵」となっている。一方の『三国史記・百済本紀 第六 義慈王』では、「豊知之 帥親信 掩殺福信 遣使高句麗・倭國乞師 以拒唐兵」とあり、福信に対する暗殺、高句麗・倭国に救援軍を求めるなどの点において、『資治通鑑・卷第二百一』よりも、『舊唐書・劉仁軌傳』には類似している。これらの点からも、『三国史記』が『舊唐書』の内容を参照にした部分が多いと考えられよう。

ちなみに、「與倭人並降」という記事は『三国史記・百濟本紀 第六 義慈王』にのみ記されていることも、注目に値する。百濟が「倭人」を戦友として取り扱い、自分だけではなく、戦友の倭人も投降したことを記載する記し方をしている。しかし一方で、戦友である倭国側の資料—『日本書紀』では全く触れていない。戦敗とはいえ、『日本書紀』「天智紀」における白村江の戦いの記事の最後に「百濟之名絶于今日」とあるごとく、白村江の戦いに関わる一連の記事は、百濟救援のための出兵の理由、および百濟の滅亡を示すように描かれている。『日本書紀』のこうした記し方は注目に値しよう。

以上の比較対照を通して『日本書紀』「天智紀」における白村江の戦いの記述については次のような特色があげられよう。

- (1) どれぐらいの軍兵・軍船を出したのか、明記していない。
- (2) 日本と百濟王は互いにうまく連合できず、日本軍の内部は混乱し、戦略がなかったことを敗戦の要因として記している。
- (3) 敵軍（唐軍）の軍勢および優れた軍略を強調し、それを戦事の勝利とした。
- (4) 「須臾之際、官軍敗績。赴水溺死者衆。」というように、自らの敗戦の経緯および時間の経過について量しているような記し方をしている。
- (5) 「朴市田来津仰天而誓、切齒而嗔、殺数十人、於焉戦死。」と、將軍朴市田来津の武勇と忠烈を示している。
- (6) 最後に「百濟之名絶于今日」とあるごとく、この記事が百濟の滅亡の経緯として描いているのである。

『日本書紀』「天智紀」において、この日本古代の最大の戦いに関する描写は、中国側および朝鮮側の資料に比べれば、かなり簡潔だと言わなければならない。さらに、最初から百濟の救援に応ずるために、出兵したというように記しているが、百濟がなぜ日本に救援を求めたのか、百濟が朝鮮半島の諸国の間ではどのような立場に立っていたのかなどについても、「天智紀」では殆ど記していなかった。

しかし、『舊唐書・卷八十四』には「餘豊在北，餘勇在南，百濟、

高麗，舊相黨援，倭人雖遠，亦相影響，若無兵馬，還成一國。」とある。また、『資治通鑑・卷第二百一』にも「百濟、高麗，舊相黨援，倭人雖遠，亦共為影響，若無鎮兵，還成一國。」とある。さらに、『三国史記・百濟本紀 第六 義慈王』には「論曰」が見えるが、その内容によれば、百濟と高句麗は同じく扶餘の出自である。また曰く、秦・漢の戦乱の際に中国人が多く海東に避難したが、それがすなわち三国の祖先になったという。しかし、百濟が非道を多く行い、新羅を代々の敵とするため、高句麗と連合して、常に新羅を侵略した。これは隣人に対する親善の行為ではない。よって、唐の天子が召命を下し、その恨みを鎮めようとするが、百濟が表には唐の命令に従いながらも、裏にはそれを背いていた。したがって、大国（宗主国・唐）に対して罪を犯した。このような百濟なら、滅ぼされても仕方がないという。

このような内容からも、百濟が朝鮮三国の中で非常に侵略性のある国であったことが分かる。それにもかかわらず、百濟がうまく高句麗と連合し、さらに倭国の力を利用し、新羅および唐軍と対抗していた。とうとう滅亡の道に向かった。百濟・高麗・倭との関係について、前掲した『舊唐書・卷八十四』と『資治通鑑・卷第二百一』の内容を通して、百濟・高麗は古い時代から互いに助け合い続けてきたこと、倭人はやや遠いが、やはりともに影響し合っていることが読み取れる。ほかにも、『通典・邊防一・序略』によれば、倭と夫餘は中国の漢朝から、また百濟と新羅は中国の魏朝から、中国への朝貢を絶えなかったという。つまり、朝鮮諸国・倭国が中国と交流することは古い時代から始まっていたのである。しかしそれと同時に、見てきたように、新羅、百濟が日本に対しても朝貢を行っていた。高麗も日本に援軍を求めたのである。

このように中国側および朝鮮側の資料を見合わせれば、朝鮮三国は、中国と朝貢関係を保ちつつ、日本ともある程度の連合関係があり、朝鮮三国の間に、中国と日本との力を借りて、互いに牽引しつつあったことが分かる。さらに、百濟が常に高麗と連合し、新羅を

攻撃していたので、日本と親交がある百済こそ侵略者であり、滅ぼされるべき存在だったのである。しかし、こうした百済のイメージは『日本書紀』では全く触れられていない。新羅が高麗、百済に対して常に侵略しようとしたゆえに、日本は常に百済、高麗に援軍を送っていたというように『日本書紀』が記しているのである。日本側の視点は、中国側および朝鮮側の資料とはずれがあることに注目すべきである。

さらに、中国は当時の東アジア国際社会の中心であり、諸国が朝貢する対象で「宗主国」として存在していた。日本は単なる中国の「朝貢国」の一つだけであった。にもかかわらず、日本は敢えて新羅・百済の守り役を果たそうとした。そのうえで、朝鮮諸国の朝貢を受けたことは、『日本書紀』で繰り返して記されている。この点からも、日本と朝鮮諸国の間にも「宗主国—朝貢国」という関係が存在しており、日本が世界の中心と見なしていた中国の持つ「中華思想」を模倣していると見てとれる。

中華思想は中華意識、華夷思想とも呼ばれている。この思想は古代の中国王朝と周辺民族・国家との関係に大きく影響を与えている。西嶋定生『日本歴史の国際環境⁸』では次のように述べている。
中国王朝と周辺民族との関係のあり方には（中略）中国側からみた場合に、もともと二つの論理があった。その一つは華夷思想であり、他の一つは上述の王化思想である。前者は中国と夷狄とを分別する論理であり、後者は両者を結合させる論理である。そしてこの二つの論理を規定する共通の原理は「礼」という観念の存在であった。夷狄は礼を知らぬから中国と分別しなければならぬというのが華夷思想であり、礼を知らぬ夷狄が王者の徳に同化されて礼に従うようになるというのが王化思想である。そして礼を原理とするかぎり、華夷思想と王化思想と

⁸ 西嶋定生『日本歴史の国際環境』、東京、東京大学出版会、1990、p. 27（初出は西嶋定生「一～三世紀の東アジアと倭国」、『ゼミナール日本古代史（上）』光文社、1979）

は儒教思想において最も明確に表現される。

このように、「中華思想（華夷思想）」はまさに中国帝国と周辺民族との主従、または上下関係を定める政治意識として言えよう。ところが、このような「中華思想」は中国だけではなく、日本および朝鮮諸国にも認められる。石母田正『日本古代国家論 第一部⁹』では、

三世紀の邪馬台国およびヤマト王権から、倭五王以降の国家を区別する基本的特徴は、国内体制を別とすれば、後者が朝鮮におけるいわゆる「任那」を軸として百済・新羅等を朝貢国として隷属させるところの小帝国に転化しようとする一貫した政策にある。かかる日本の支配層の対外政策は、隋書倭国伝の言葉をかりれば、「大国」としての国際的地位を確立しようとする努力があり、後に徽宗皇帝からの書状にみえる「爾東夷之長、実惟日本之邦」の用語を借用すれば、「東夷ノ長」または東夷の小帝国として国際的に承認されたいという要求である。

という。さらに、氏は、律令は単に国内の支配体制を法典化しただけでなく、「蕃国」（新羅を含めた朝鮮三国）、または国内の夷狄（エミシ、ハヤトが代表である）を「従属」させる体制としての国家を法制化し、天皇の地位もかかる「小帝国の首長」であることが前提とされたところに一つの特色があると指摘する。また、朝廷の正月の儀式において「蛮客」とエミシ等が並んで拝賀する形式—それは唐の皇帝の儀式の小規模な模倣—からも明らかであり、この小帝国の維持のために、朝鮮出兵を賭しても失ってはならないものであったと論じる¹⁰。

上掲した石母田氏の論説からも、日本は「蕃国」である朝鮮三国および日本国内の「夷狄」である蝦夷などを服属させ、当時東アジアの「帝国」と目されていた中国を模倣し、「東夷の小帝国」の体制を構築しようとしたことが分かる。百済救援のための出兵、白村

⁹ 石母田正『日本古代国家論 第一部』、東京、岩波書店、1973、pp. 319-320

¹⁰ 石母田、前掲注（9）書、pp. 321-326

江の戦いへの参与はいずれも、朝鮮諸国の従属外交を強制し、「東夷の小帝国」たらんとする日本の意志に関わっているものとして理解できよう。日本が構築しようとする「東夷の小帝国」の政治意識は、いうまでもなく中国の「中華思想（華夷思想）」に基づいて生まれたものなので、ここでは「小中華思想」と呼ぶことにする¹¹。

ところが、こうした「小中華思想」は、日本だけではなく、朝鮮諸国の中にもある。この点について、川本芳昭「漢唐間における「新」中華意識の形成：古代日本・朝鮮と中国との関連をめぐって¹²」では次のように論じている。

古代の日本において中華意識の形成があったこと、同様の動きは高句麗や百済、新羅にあっても生じたこと、そうした動きの先駆けは年号や太王号の使用などから考えて高句麗によってなされたことと比較したとき、五胡によって建設された華北の諸国における中華意識の形成は、古代朝鮮や日本におけるそうした意識の形成時と重なる部分もあるが、そうした動きより先行したものであったことがわかるのである。

すなわち、高句麗、百済、新羅は中国と日本との両方と交流しながら、三国の間ではいずれも外の力を借りて、ほかの二国を呑み込

¹¹ 「小中華」という用語に関して、森公章『「白村江」以後—国家危機と東アジア外交』（東京、講談社、1998、p. 8）では「日本はこの時期、七〇一年にすでに大宝律令を制定し、唐と同様の律令国家を確立していた。そこで、多くの国々の心服をえた帝国たる唐の下にあって、自らも唐と同様の律令体制をもつ国として、朝鮮諸国に対しては〈小帝国〉・〈小中華〉として君臨しようとしたと考えるわけである。」と指摘し、「小帝国」と並んで「小中華」という用語を使った。また、中国の学者達においてもこの用語が常に用いられているものである。たとえば、倪佑密「古代日本華夷思想的萌芽以及發展軌跡—以漢唐時期中日外交文書為中心」（『青年文學家』、黑龙江齐齐哈尔、青年文學家杂志社、2012年第11期、pp. 84-86）では「漢唐時期，日本便由一個典型的朝貢國漸漸萌生出自己的小中華思想」とあり、姜智恩「“華夷秩序”的東亞構架與自解體內情」（『中央研究院近代史研究所集刊』第96期、台北、中央研究院近代史研究所、2017、pp. 31-60）では「朝鮮儒者素以〈小中華〉自任，因此被定位為〈朝鮮中華主義〉」という。また、謝桂娟『華夷觀與傳統東亞國際秩序研究』（吉林、延邊大學世界史研究所、2015）には、「朝鮮產生了“小中華”意識」とある。これらの論文は日本または朝鮮で生じた、中華意識を模倣する政治意識を「小中華」と呼んでいる。

¹² 川本芳昭「漢唐間における「新」中華意識の形成：古代日本・朝鮮と中国との関連をめぐって」『九州大学東洋史論集. 30』、九州大学文学部東洋史研究会、2002、p. 16

みたがっており、古代日本と同じ「動き」または中華意識を中心とした国際政治意識は、これら朝鮮三国にもあったことが分かる。さらに、朝鮮半島の不安定な政治情勢の中で、日本はあえて朝鮮三国からの「ミツキ」を受け、「宗主国一朝貢国」「支配者一被支配者」という関係を作ろうとしていたのが前述したとおりである。日本のこうした「動き」または思惑こそが、白村江への出兵理由の核心として見ることができよう。

しかし、この白村江への出兵は失敗に終わってしまった。白村江の戦いが失敗した具体的な理由として、森公章『天智天皇¹³』は主に次の三点を挙げている。

(1) 軍事策略が欠けている。

百済の救援のために白村江の戦いに参与した際に、日本は前後して三回ほど出兵した。出兵の目的が毎回少し違っているけれども、全体からみれば、日本軍は精密な軍事策略が欠けており、軍隊全体は指揮者がいなかったといえる。

(2) 地方と中央との連結が足りない。

朝鮮半島に渡る際には、前中後といった順序があるにしても、日本軍の軍事編成はやはり従来の地方豪族の集団方式を保っている。しかし、それと同時に、中央豪族も自らの兵力がある。地方と中央との間に統一した指揮のシステムがない。これもまた孝徳天皇が積極的に中央集権の国家体系を推進していたが、その成果はまだ中央と地方が連結できたという程度に至っていないと言わなければならない。そのため、国を挙げて兵隊を送ったとしても白村江の戦いで大きな失敗を喫した。

(3) 中央律令国家建設の強化が必要である。

白村江の戦いでの失敗は中大兄皇子にとっては、中央律令制度がまだ完備していないことを意味している。それによって、中大兄皇子も改めて中央律令国家を建設する必要性を確認したの

¹³ 森公章『天智天皇』、東京、吉川弘文館、2016、pp. 5-8、p. 173

である。

こうして、日本は長い間に朝鮮諸国の動向に細心な注意を払いつつあったにもかかわらず、国内勢力をうまく統合できなかったし、唐の軍勢についてもやや軽く見ていたようである。これらはすべて白村江の戦いの失敗に繋がっていく。

しかし、この失敗について、中大兄皇子は決して長く落ち込んでいた時間はなかった。外交でも内政でも様々な困難が迫ってきたからである。果たして、中大兄皇子が如何にこうした困難の状況を乗り越えようとしたのか。戦後の天智朝はどのような政策が施されたのか。これらの問題は節を代えて検討していきたい。

4. 敗戦後の天智朝

さて、敗戦後の天智朝の政策については主に次の三点にまとめられよう。(一) 二十六冠位の制定 (二) 防・烽・山城・水城といった防御機関の建設 (三) 近江への遷都、以下のこの三点について、検討していこう。

(一)の二十六冠位の制定に関して、「天智紀」三年二月条には「三年春二月己卯朔丁亥、天皇命大皇弟、宣増換冠位階名及氏上・民部・家部等事。其冠有二十六階」というように記されている。この二十六階の冠位について、鬼頭清明『白村江—東アジアの動乱と日本¹⁴』には次のような指摘がある。

ともかく、白村江の敗戦後、新たに施行された冠位制度はすべて二十六階で、孝徳天皇の下で六四六年に施行されたと『書紀』の記す冠位制度が十九階なのに対して七階ふえている。このふえている部分は、後の大宝令などの官位では四位・五位以下の範囲であって、主としては、六位以下の中下級の官人に相当する部分が整備され、位階のきざみ方が多くなっている。このことは天智天皇の方針は畿内大豪族をみずからの秩序のなかに編成することより、むしろ中下級の豪族を官人として編成して、権力機構の足腰を強化しようとしたのではないかと思われる。

¹⁴ 鬼頭清明『教育社歴史新書〈日本史〉33 白村江—東アジアの動乱と日本』、東京、教育社、1981、pp. 173-174

このように、天智天皇の政治方針の一つに官僚機構の強化という点をあげるとすると、注目されるのは、百濟からの亡命者たちの動向である。

氏の指摘を踏まえれば、この冠位二十六階という新しい政策はすなわち中央集権を推進するための権力機構の足腰を強化するために中下級の豪族を官人として編成したものだとして理解できよう。

天智天皇はかつて皇太子中大兄皇子の身分で孝徳朝の大化改新を主導した時も主に豪族、貴族の私有民、私有地を中央に回収するとともに、新しい冠位を通して貴族や官人の身分秩序を再編しようとした。その目的は、大和朝廷の権力機構を強化することにある。天智朝に至って、冠位は十九階から二十六階までさらに七階増えた。中大兄皇子が冠位の調整を通して、中央政権を一層強化しようとする意図が明白である。さらに、中央集権に関わる政策を具体的に実施するために権力機構の力が必要とされるが、この際に中下級の豪族を官人として編成し、権力機構の実行力を向上させようとすることは効果的な政策だったと言える。

ところが、そもそも白村江の戦いに参与したことは、単なる外交面的な意義だけではない。鬼頭氏によれば、「中大兄ら大和朝廷の首脳陣が百濟に対する救援軍の派遣を決意した背景には、単に外交路線上の問題だけでなく、大和朝廷の国内支配の問題もあったのである。」「古くからの社会秩序が動揺し、大和朝廷が権力を集中するためには、対外的な軍事行動における成功が必要となったことである。¹⁵」という。つまり、対外的な軍事行動の成功は、大和朝廷の権力集中にも繋がっていると言える。

しかし残念ながら、白村江の戦いは失敗に終わってしまった。白村江の戦いの前に既に中央集権を進めていた中大兄皇子は、白村江戦役の失敗によって、一層、国内管理を強化しようとしていた。冠位二十六階もその国内秩序の再編成をし、中央集権を推進するため

¹⁵ 鬼頭、前掲注（14）書、pp. 168-170

の権力機構の足腰を固めようとする政策の一つである。

冠位二十六階だけではない。中大兄皇子は中国と交流しつつも、中国からの攻撃に細心を払い、防御をしていた。この点は「天智紀」三年条の記事を通して読み取れる。「天智紀」三年条には「夏五月戊申朔甲子、百濟鎮將劉仁願、遣朝散大夫郭務悰等、進表函与献物。」「冬十月乙亥朔、宣發遣郭務悰等勅。是日、中臣内臣遣沙門智祥、賜物於郭務悰。戊寅、饗賜郭務悰等。」「十二月甲戌朔乙酉、郭務悰等罷歸。」とある。白村江の戦いの敗戦後に、劉仁願が郭務悰らを遣わし、表函と献上品とを進上したのに対して、中大兄皇子が郭務悰に下賜をし、さらに郭務悰らを饗宴した。

また、「天智紀」四年条には「九月庚午朔壬辰、唐国遣朝散大夫沂州司馬上柱国劉徳高等。」「十一月己巳朔辛巳、饗賜劉徳高等。十二月戊戌朔辛亥、賜物於劉徳高等。是月、劉徳高等罷歸。」ということも記されている。唐国が劉徳高らを日本に派遣した。日本も同じく彼らを饗宴し、下賜した。

このような記事からも、白村江の戦いの後、唐国は日本との交流（または監視・管理）を一層強めようとし、度々遣使を行ったことが想定できる。日本もそれに応じて、尽力して接待をした。

しかし一方、中大兄皇子は白村江の戦いから受けた衝撃と教訓は決して小さいものではない。この点は（二）防・烽・山城・水城といった防御機関の建設が進められていたことから窺える。

天智三年条に「是歳、於対馬嶋・壱岐嶋・筑紫国等、置防与烽。又於筑紫、築大堤貯水、名曰水城。」、四年条に「秋八月、遣達率答怱春初、築城於長門国。遣達率憶礼福留・達率四比福夫於筑紫国、築大野及椽二城。」、六年条に「是月、築倭国高安城、讚吉国山田郡屋嶋城、対馬国金田城。」とあるごとく、中大兄皇子が敗戦後、多くの防御機関を作り、さらに日本へ逃亡してきた百濟人の軍事技術を援用し、北九州、瀬戸内海、また日本畿内一帯の朝鮮式山城建築を作り出した。

さらに、これら多くの防御施設のほかに、（三）近江への遷都も行

われた。「天智紀」六年には「三月辛酉朔己卯、遷都于近江。是時天下百姓不願遷都、諷諫者多、童謡亦衆。日々夜々、失火処多。」とあるごとく、人々の願わない遷都だが、中大兄皇子が六年三月に都を奈良から近江（大津城）に移した。まもなく、天智七年正月に初めて「天皇」として即位した。中大兄皇子は皇極朝、孝徳朝、斉明朝を亘り、長い間政権を握りつづけており、さらに斉明崩御後の六年間ほど「称制」をも行っていた。様々な事情で即位しなかった中大兄皇子は、近江へ遷都した翌年に即位した。このようなことから、近江遷都は中大兄皇子にとっては重要な意義があると考えられよう。

琵琶湖のほとりに位置した近江城（大津城）について、遠山美都男『古代日本の女帝とキサキ¹⁶』では次のように述べている。

阿倍比羅夫が北征当時「越国守」の地位にあったことから明らかのように、敦賀を始めとした良港の点在する北陸地方は遠征の軍事基地であった。これらの点から言って、大津が琵琶湖や北陸の諸港を介して東北・北海道地方（服属させた蝦夷）に対する支配を強化するのに至便な場所であったことが分かる。

また、

天智は、斉明の二大軍事作戦のうちの北方遠征による蝦夷の服属という成果を正しく受け継ぎ、それをさらに強化するには、大津こそが格好の拠点と判断し、そこに王宮を造営することになったと考えることができる。

氏の指摘を踏まえれば、近江は当時の水陸交通の要衝だけでなく、琵琶湖の水運を介して北陸の要港である敦賀に連絡することができた。さらに、大津から北陸への連結は北陸にいる蛮族と見なされる蝦夷に対する管理・支配にも繋がっているのである。つまり、近江への遷都は、斉明天皇時代における蝦夷を支配する政策を引き継ぐものであり、国内管理を強化するための行動として捉えることができる。そこには日本国内の「夷狄」を服属させるという「小中

¹⁶ 遠山美都男『古代日本の女帝とキサキ』、東京、角川書店、2005、p. 104

華思想」も働いていたはずである。

ところが、この近江大津宮の意義は国内管理を強化するという意義に留まらない。水運を通して、朝鮮諸国との往来もし易くなるため、琵琶湖の近辺に多くの百済の渡来人が在住した。これもまた、朝鮮諸国の人材のみならず、物資、軍事および建築技術などの導入が飛鳥の都（倭京）よりも容易になった。北九州、瀬戸内海、また日本畿内一帯の朝鮮式山城建築が作り出されたこともこうした背景から生まれたものであろう。このことから、「近江大津宮に遷ったのも、白村江戦後、唐の侵攻に備えて西日本全体の防衛を強化する計画の一環であった¹⁷」という遠山氏の指摘が的を射ていると思われる。要するに、近江大津城への遷都は、対内的管理と対外的防衛という両面的な意義を持っていたと言える。

以上は敗戦後の天智朝の政策を見てきたが、これらの政策を通して日本古代の最大の対外戦争である白村江の戦いは単なる対外的な意義だけではなく、対内的な意義を持つことが認められよう。

白村江の戦いの対外的および対内的な意義・目的に関しては、倉本一宏『戦争の日本古代史 好太王碑、白村江から刀伊の入寇まで¹⁸』には詳しい論考がある。氏によれば、中華帝国から独立し、朝鮮諸国を下位に置き、蕃国を支配するという東夷の小帝国を作りたいという願望が、古くから倭国の支配者には存在し、中大兄と鎌足もそれにのっとったのだという。氏の指摘している白村江の戦いの対外的な目的は、本稿のこれまでの考察を通して認められるものである。

それと同時に、氏は白村江の戦いの対内的な目的の可能性としては次の三点を挙げている。(1) 中大兄が派兵に踏み切った段階というのは、百済の遺臣鬼室福信たちが唐の進駐軍に対して叛乱を起こし、各地で勝利を収めていた時期であった。(2) 当時の兵力や兵器、それに指揮系統の整備レベルから考えて、もしかしたら唐には負けるかもしれないと思いつつも、なお、負けた場合に、唐が倭国に攻め

¹⁷ 遠山、前掲注(16)書、p.103

¹⁸ 倉本、前掲注(4)書、pp.154-157

てくるとは想定せずに、国内はこれによって統一されるであろうということを、中大兄と鎌足は考えた。(3) 中大兄たちの起こした対唐・新羅戦争というのは、勝敗を度外視した、戦争を起こすこと自体が目的だったのであり、それによって倭国内の支配者層を結集させ、中央集権国家の完成を、より効果的におこなうことを期したものである。

氏のいう(1)の理由はやはり中大兄皇子が目の前にある福信軍の勝利を見て、唐・新羅連合軍の実力を過小評価し、見通しが甘かった部分もあろう。しかし、(2)と(3)に関しては、果たして敗戦することが予測できたとしても、国内の統一、中央集権国家の完成を図るため、中大兄皇子があえて白村江の戦に向かっていったのかについては疑問が残る。なぜなら、見てきたように、中大兄皇子が敗戦した翌年(天智三年)すぐに二十六冠位の制定を行っているのである。同年にも防・烽・山城・水城といった防御機関の建設を始め、さらに数年間の間に、西日本において、集中的に防衛工事を推進していた。このように極めて短い期間に、防塞施設の造営が相次いで行なわれ、さらにその築造地が対馬→壱岐→北九州→長門→屋島→高安と大陸から大和への進入コースに当たっていることなどを考えあわせるならば、「その緊迫の源が対大陸関係にあった¹⁹」ことが考えられる。以上に述べてきたものをまとめてみれば、白村江で全面的な敗北を喫したことによって、中大兄皇子は一層深く、国内各豪族の勢力の整合および自己防御の重要性を実感したため、大化改新の路線を踏まえつつ、さらに様々な新政を推進していたと考えるのが妥当であろう。

5. おわりに

このように、『日本書紀』『天智紀』の内容をみれば、(一) 白村江の戦いの背景 (二) 白村江の戦い、(三) 敗戦後の天智朝、この三つ

¹⁹ 笠井倭人『古代の日朝関係と日本書紀』、東京、吉川弘文館、2000、pp. 176-177。(初出：上田正昭編『日本古代文化の探求—城』、東京、社会思想社、1977)

のパートに大別できるが、(一)の部分においては、日本は度重ねて百済、高麗に援軍を送り、高麗と百済を新羅の攻撃から守ったという「守り役」を果たしたように描かれている。また、世界の中心と見なされていた中国と近辺の国との間には「宗主国—朝貢国」という中国的政治意識—「中華思想（華夷思想）」が存在している。日本がそれを模倣し、「小中華思想」を構築しようとしている。この点は上掲した「天智紀」に記されている多くの記事を通して示唆されているのである。

(二)の部分においては、中国・朝鮮の資料には「倭兵」「倭国」などの表現があるが、『日本書紀』『天智紀』にはそれが認められず、「日本」と表記されているのである。また、『舊唐書』『資治通鑑』『三国史記・百済本紀』にはいずれも「四戦皆捷，焚其舟四百艘，煙炎灼天，海水皆赤」といった戦いの経緯を記す章段があるが、『日本書紀』『天智紀』にはそれがなく、代わりに唐軍の軍勢の雄大さ、戦略の巧妙さ、日本軍を代表する将軍朴市田来津の勇武さおよび忠烈を語っている。それと同時に、日本軍がやむをえず、戦敗してしまったことを示しながら、自らの敗戦の経緯および時間の経過については曖昧な記述をしている。さらに、『舊唐書』『資治通鑑』『三国史記』によれば、日本と親交のある百済こそが侵略者で、朝鮮半島の平和を破壊した元凶であるように描かれているが、この点は『日本書紀』には認められない。

(三)の部分については、二十六冠位の制定、防・烽・山城・水城といった防御機関の建設、近江への遷都などの改革を通して、国内の安定、国内管理の強化に腐心した天智天皇の形象が示されているのである。

この三つのパートの記述に対する考察分析を通して、『日本書紀』『天智紀』の記し方は次のような特色が指摘できる。

(1) 白村江の戦いを直接に描写する章段は中国と朝鮮の資料と比べれば、短いし、戦いの経緯や日本の軍勢などについても曖昧に暁している。全体としては、百済救援のための出兵の理由、および百

済の滅亡の経緯を示そうとするような記し方を選び取っている。

(2)『日本書紀』では百済を平和の破壊者として取り扱うことはなく、百済・高麗がともに新羅からの侵略を受けたため、日本は百済・高麗を守ろうとする守り役を果たしているように記している。このような記し方は大和朝廷が対外的に朝鮮諸国との歴史関係を述べ、朝鮮諸国に対して主権を強調しようとし、「小中華思想」を固めようとする対外的な意義があると認められる。

(3)天智天皇（中大兄皇子）は白村江の敗戦によって、国内政権の安定を強化しようとし、中央政権を一層熱心に進めようとしてもいる。そのため、敗戦後の天智朝の様々な改革が重点的に描かれることとなった。

以上のように、白村江の戦いは、東アジアの各国の関係、国際情勢の変動、国境または国家観の再構築とは深く繋がっており、古代東アジアを理解するにあたり重要な手掛かりなのである。それだけではなく、「天智紀」に描かれている、古代日本の最大の対外戦争—白村江の戦いに関わる記事を分析し、さらに日本、中国、朝鮮各国の文献資料の比較対照を通して、日本の正史の濫觴である『日本書紀』の記し方の特色を一層深く理解することもできたのである。

しかしながら、天智天皇が積極的に推進していたこれら中央集権の国家体制は、弟の天武天皇と娘の持統天皇の時代において大いに成長したことから、「天智紀」の内容を「天武紀」「持統紀」と併せて検討する必要もある。さらに、白村江の戦いおよび「天智紀」の様々な改革は古代日本にはどれぐらいの影響力を持つのかをさらに検討する余地も出てこよう。これらの問題は今後の課題としたい。

付記：本稿は2019年11月2日に台湾大学日本研究センターによって開催された「東アジア日本研究者協議会 第4回国際学術大会」にて同題で発表した内容をまとめたものである。会議中、諸先学から有益なご意見をいただき、また論文掲載に当たり、査読の先生方から貴重なコメントをいただいた。ここ

に記し、心からの御礼を申し上げたい。

テキスト（配列は作者名の五十音順による）

（日本語）

小島憲之ほか校注・訳、『新編日本古典文学全集 3 日本書紀 2』、
東京、小学館、1996

小島憲之ほか校注・訳、『新編日本古典文学全集 4 日本書紀 3』、
東京、小学館、1998

（中国語）

王雲五編、『萬有文庫 第二集 通典』、上海、商務印書館、1935

金富軾撰、李載浩訳、『三国史記』、首爾、松樹(SOL)出版社、1997

楊家駱主編、『新校本舊唐書附索引(四)』、台北、鼎文書局、2000

楊家駱主編、『新校本舊唐書附索引(六)』、台北、鼎文書局、2000

韓兆琦ほか注訳『新譯資治通鑑(二十七)唐紀十六～二十二』、台
北、三民書局、2017

参考文献（配列は作者名の五十音順による）

（日本語）

石母田正『日本古代国家論 第一部』、東京、岩波書店、1973

笠井倭人『古代の日朝関係と日本書紀』、東京、吉川弘文館、2000
（初出：上田正昭編『日本古代文化の探求一城』収録、東京、社
会思想社、1977）

川本芳昭「漢唐間における「新」中華意識の形成：古代日本・朝鮮
と中国との関連をめぐって」『九州大学東洋史論集 30』、福
岡、九州大学文学部東洋史研究会、2002

鬼頭清明、『教育社歴史新書〈日本史〉33 白村江—東アジアの動乱
と日本』、東京、教育社、1981

遠山美都男、『古代日本の女帝とキサキ』、東京、角川書店、2005

中村修也、『天智朝と東アジア 唐の支配から律令国家へ』、東京、
NHK 出版、2016

西嶋定生『日本歴史の国際環境』、東京、東京大学出版会、1990（初

- 出は西嶋定生「一～三世紀の東アジアと倭国」、『ゼミナール日本古代史（上）』光文社、1979)
- 広瀬憲雄『古代日本外交史—東部ユーラシアの視点から読み直す』、東京、講談社、2014
- 森公章『「白村江」以後—国家危機と東アジア外交』、東京、講談社、1998
- 森公章『天智天皇』、東京、吉川弘文館、2016
(中国語)
- 姜智恩「“華夷秩序”の東亞構架與自解體內情」『中央研究院近代史研究所集刊』第96期、台北、中央研究院近代史研究所、2017
- 倪佑密「古代日本華夷思想的萌芽以及發展軌跡—以漢唐時期中日外交文書為中心」『青年文學家』、黑龙江齐齐哈尔、青年文学家杂志社、2012年第11期
- 謝桂娟『華夷觀與傳統東亞國際秩序研究』、吉林、延邊大學世界史研究所、2015